研究論文

コロナ禍における大学サークルの困難と可能性
―フォルクローレ演奏サークルを事例として―

間篠　剛留*

日本大学文理学部

Difficulties and Possibilities of University Circle Activities During the COVID-19 Pandemic: A Case Study of Andean Music Performance Circles

Takeru MASHINO

College of Humanities and Sciences, Nihon University

This study sought to clarify the actual situation of university circles during the COVID-19 pandemic and to obtain suggestions about the meaning of the actions taken by each circle. Although prior studies have indicated that circle activities are in crisis in the pandemic, there has been little accumulation of descriptions of specific situations of difficulty. In response to this trend, this study conducted a case study of an Andean folk music performance circle—an example of minor music performance circles—by interviewing their current university student members (N=6) and alumni (N=3) to uncover the specific restrictions to which it was subject; the survival strategies it adopted in the face of such restrictions; and how the university, graduates, and the local community were involved in these strategies. Restrictions on circle activities differed greatly from one university to another, partly due to student government activities. The different situations across universities made it difficult to share know-how and realize the benefits of such knowledge exchanges, which made circle–circle cooperation difficult. On the other hand, differences in resources across universities and circles encouraged cooperation between circles at different universities. Generally, each circle worked to maintain a student culture in which playing minor music was an enjoyable activity; notably, the pandemic may have prompted circles to rebuild relationships with people or groups outside their current members to achieve this purpose.

キーワード：課外活動，サークル活動，コロナ禍，卒業生，地域社会

Keywords:
Extracurricular Activities, Circle Activities, COVID-19 Pandemic, Alumni, Local Communities

はじめに

本研究は，コロナ禍における大学サークルの実態を明らかにするとともに，現在のサークルの危機から学生たちがサークル活動にどのような可能性を見出そうとしているのかを明らかにすることを目的とする。

2020 年にはじまるコロナ禍において各大学の教育活動は大きく制限されたが，その制限はサークル活動

*E-mail: mashino.takeru@nihon-u.ac.jp
投稿：2022年5月11日　　受理：2022年11月17日

に対して特に強いものだった。全国大学生活協同組合連合会（2022）によると，1年生のサークル所属は2019年秋の82.8％から2020年秋には48.7％と大きく減少した。単に所属率が低下しただけでなく，課外活動が満足に実施できていない状況についても様々な大学で報告されている（e.g., 東京大学消費生活協同組合，2021；立命館大学出版社，2020）。2021年半ばになると，文部科学省が課外活動における感染症対策について情報共有を行うなど（文部科学省，2021），活動再開に向けて歩みは進められたが，それでも課題は多い。2021年夏に朝日新聞・河合塾が共同で実施した調査によると，「各大学の学長が現在大きな課題と考えている項目」のうち，最も回答が多かったのは「課外活動の実施」だった。「授業」・「研究」については「全学生に許可」する大学が8割を超える一方，「課外活動」は34％にとどまっており，課外活動に関して再開が遅れている状況が見られる（『朝日新聞』2021年9月27日朝刊24面）。活動制限の長期化はサークルの文化継承を困難にし，活動存続の危機を引き起こしている（石田，2021）。

サークル活動への参加が大学生活への適応や多様なスキル獲得などに影響を与えていることはすでに複数の研究で指摘されてきた（e.g., 池田・伏木・山内，2018；武内・浜島，2005；田澤・梅崎，2011）。サークル活動が大学生活や大学教育に対して持つ意味は少なくない。しかし，コロナ禍での実態に関しては十分に明らかになっていない。課外活動の中でも大学スポーツに関しては，教員が関わることも多いこともあってか，研究や報告は少なくないが（e.g., 江原，2021；佐々木，2021；吉田，2021），サークル活動に対しては相対的に関心が低い。サークル活動は，学生が自主的に立ち上げた課外活動団体の活動であるため，その実態も明らかになりにくいと考えられる。大学教育学会2021年大会では「コロナ時代の大学教育の挑戦―大学教育と学生生活の両面から―」と題するシンポジウムが開催されたが，サークル活動の危機は扱われなかった。日本高等教育学会『高等教育研究』第24集ではアフターコロナの「新たな大学像の模索」を目的とした特集が組まれたが，ここでもサークル活動はごく一部の言及にとどまった。

サークル活動の危機も含んでコロナ禍の影響を検討したものとしては，茨城大学人文社会科学部法律経済学科労働経済論ゼミナール・茨城大学学生団体学びと交流の秘密基地（2021）が挙げられる。ここではサークルに関して，大会やイベントの中止，そしてそれに伴い経験を十分に積めないまま下級生への引継ぎを迎えることなどによって，存続の危機に陥る団体があることが報告されている。しかしながら，サークル活動の具体的な実態はここでは扱われてはいない。そこにはサークル活動があまりに多様であり，実態をつかむのが困難だということもあるだろう。そこで本研究では，特定のサークル活動に限定して，そのサークルがコロナ禍によりどのような影響を受け，そのなかでどのように活動していたのかを明らかにする。

1　研究の方法と対象

上記の関心の下でとりうる方法は多様に考えられるが，本研究ではマイナー音楽サークル，具体的にはフォルクローレ演奏サークルを事例としてインタビュー調査を行う。マイナー音楽演奏サークルを取り上げる理由は，コロナ禍における活動の困難が特に大きいと考えられるからである。音楽演奏サークル，特に歌や管楽器の演奏を含むサークルは，感染対策上，通常期と同じような活動が難しい。さらに，マイナー音楽は他のメジャー音楽に比べて新入生に経験者が少ないため個人での練習が難しく，それゆえ新入生の獲得や演奏技術伝達に関しても苦戦が強いられたと考えられる。厳しい環境に置かれた事例を検討することによって，サークル支援を考える際に見落としがちな検討材料を得ることができるほか，危機に面して生じたサークルの可能性を見出すことも可能であろう。また，コロナ禍における学生の状況に関しては，前述の各種調査のようにアンケート調査がすでに多数実施されている。しかし，サークル活動の危機の具体的状況は見えにくいし，大学間の差異も十分明らかにされてはこなかった。そのため，本研究では複数の大学の学生に対

してインタビュー調査を行い分析するという方法をとる。

分析に当たっては，サークル外との関係に注目する。サークルは趣味で集まる学生の閉じた世界と考えられがちだが，実際にはそうではない。大学当局や学内他団体との関係もあれば，他大学の同種のサークルや，卒業生，地域社会との関係もある。後述の通り，これらの関係は，危機に直面した各大学サークルの特徴を鮮やかに示すものとなっている。

インタビュー対象者は**表１**の通りである，各大学サークルの公式SNSを通じて協力を募るとともに，スノーボール法を用いて獲得した。必ずしも各サークルの代表者に限定せず，活動について十分説明できる程度に参加している者を対象者とした。インタビュー対象となった大学生はいずれも2019年入学者で，コロナ禍以前のサークルを9か月程度経験していた。卒業生はいずれも2019年卒業者であり、在学期間はコロナ禍と重なっていない。また，同じ大学の大学院に進学した者についても同サークルの卒業生として扱った。インタビューはZoomを用いたオンライン形式で約60分～90分，半構造化インタビュー法で実施し，対象者の承諾を得てICレコーダーで録音した。録音記録から逐語録を作成し，逐語録を本研究の分析データとした。また，本文の初稿はインタビュー対象者に送付し，発言内容について，事実と異なる箇所や，発言者の意図とは異なる恣意的な切り取りがないことを確認してもらった。質問項目は**表２**の通りである。なお，本研究の実施に当たっては，日本大学文理学部研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号03-67）。インタビュー前には書面及び口頭にて，研究目的，研究協力の任意性と撤回の自由，研究成果の公表，匿名化等のプライバシーへの配慮などについて説明し，同意を得た。

２　コロナ禍前後でのサークルの活動の変化

インタビュー調査をもとに，各大学サークルのコロナ禍以前の活動概要（**表３**），2020年度の活動（**表４**），2021年度の活動（**表５**）をまとめた。大学祭や学生自治体，サークル棟等には大学ごとの固有名称があるが，匿名化のため一般的な名称に書き換えてある。インタビューの直接引用中にそれらがある場合，下線を付して示した。また，各大学によるサークル活動の制限については，可能な限り大学の公式発表に照らして確認を行った。例えば，インタビュー中に，学内でクラスターが発生したので活動禁止になったという旨の発言があった場合，大学の公式発表でその旨が明示されていない場合は大学の発表に合わせる形で示した。

表１　インタビュー対象者リスト

ID	所属／元所属	身分	インタビュー実施日
A	U大学（東北地方、国公立）	大学生	2022年1月17日
B	V大学（東京都、国公立）	大学生	2022年1月5日
C	V大学（東京都、国公立）	卒業生	2022年1月10日
D	W大学（東京都、私立）	大学生	2022年1月10日
E	X大学（神奈川県、私立）	大学生	2021年12月28日
F	X大学（神奈川県、私立）	卒業生	2021年12月27日
G	Y大学（神奈川県、私立）	大学生	2022年1月18日
H	Z大学（中部地方、国公立）	大学生	2022年1月17日
I	Z大学（中部地方、国公立）	卒業生	2022年1月22日

※カッコ書きで記した所在地は，各大学の本部ではなく，当該サークルが主として活動するキャンパスの所在地である。

表２　質問項目

現役大学生対象
1. サークルの活動概要
2. あなた自身にとって、大学のサークル活動とはどのようなものか
3. コロナ禍ではどのようにサークル活動を行ってきたか。そのなかでの問題や悩みにどのようなものがあったか
4. コロナ禍において、大学からサークルに対してどのような規制と支援があったか。また、大学からサークルに対してどのような支援が必要だと思うか
5. コロナ禍において、学外（他大学や卒業生、楽器店や地域社会等）とどのような連携をとっているか。また、どのような連携が必要だと思うか

卒業生対象
1. 当時のサークルの活動概要
2. あなた自身にとって、大学のサークル活動とはどのようなものか
3. コロナ禍の前後で、現役大学生との関わり方に変化はあったか
4. 卒業生は大学生のサークル活動どのように関与すべきだと考えるか
5. 大学からサークルに対してどのような支援が必要だと思うか

2－1．コロナ禍以前の活動

今回対象とした演奏サークルは，定期的に演奏練習を行い，学園祭をはじめとするイベントで演奏するのを主たる活動としている。表3に見られるように，コロナ禍以前には年間を通じて演奏機会が多数あった。

サークル外との関係では，複数の大学フォルクローレ演奏サークル合同で行う，春・冬の定期演奏会や「アンデス民俗音楽の調べ演奏会」がある。「コスキン・エン・ハポン」（以下「コスキン」と略）は福島県川俣町で開催されている日本最大のフォルクローレの演奏イベントであり，大学サークルだけでなく，一般のフォルクローレ愛好家やゲストとして呼ばれたプロの演奏家も演奏を披露する（www.cosquin.jp）。今回調査対象としたサークルの全てがこのコスキンに参加しており，同イベントは大学や地域，立場を越えた交流の機会となっていた。また，各大学サークルは地元地域の団体や施設から依頼されて演奏を行う機会があり，それが部員のモチベーション向上に寄与するとともに，大学サークルと地域との接点を提供していた。

2－2．2020年度の活動

上記のように多様な活動を行っていたサークルであるが，2020年度になるとその活動は一変する（表4）。

2020年度前期は多くの大学において課外活動は禁止された。対面での新歓イベントは今回調査対象としたどの大学でも行われなかった。オンラインでの新入生勧誘も行われたが，その後サークルとしての活動が

表3　コロナ禍前の各大学サークルの年間の活動（著者作成）

	U大学	V大学	W大学	X大学	Y大学	Z大学
4月	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘
5月	・合宿（新入生との親睦会）	・お寺での演奏会 ・大学祭（街頭演奏） ・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	
6月	・特別支援学校での演奏	・サークルの定期演奏会			・大学祭	・大学祭
7月						・七夕演奏会
8月		・夏合宿	・地域の夏祭で演奏	・夏合宿	・夏合宿	・合宿
9月			・大学説明会で演奏 ・神社の行事で演奏	・夏ライブ		
10月	・コスキン参加 ・大学祭	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加
11月		・大学祭（街頭演奏と室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏、室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏、室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏）	
12月	・クリスマスコンサート	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・大学のクリスマス会（ステージ演奏） ・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・サークルの定期演奏会
1月						
2月	・追いコン（卒業生を送る会）	・冬合宿		・冬合宿	・冬合宿	
3月		・卒業ライブ ・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・春合宿 ・地域の桜祭で演奏	・卒業ライブ ・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加
通常活動日（練習日）	週1回	週1回	週2回	週2回	週2回	週3回
その他	・依頼演奏（イベントでの街頭演奏や、高齢者介護施設等での演奏）が年4～6回	・依頼演奏が年2～3回		・依頼演奏が年1～2回	・依頼演奏が年に2回程度	・卒業生を招いての品評会を数回 ・依頼演奏が月1回程度
部員数（1学年）	5人前後	10人弱程度（内学外生が2人程度）	2人程度	5～10人程度	5人程度	10人前後

できないため，部員獲得に大きな困難があった。それは例えば次のような語りに見られる。

> 4月とかはオンラインの方で勧誘してたりはしてたんですけど，でも入ってもらってもやることがない，やらせることがないっていうか，やり様がなかったので，2020年は［新入部員は］0人でした。（Bさん）

> 今年［＝2021年］も去年［＝2020年］もオンラインでの新歓で興味を持ってくれた方は数人ずついたんですけど，［中略］入ってもらったところで実際練習ができなかったのでその結局その入ってくれた方々に何のケアもできないまま1年，2年と過ぎてしまったので。（Eさん）

特に東京・神奈川にキャンパスのある私立大学W・X・Yではほぼ1年間対面活動が休止となったため，この影響は大きかった。オンラインセッションという可能性もありはしたし，実際にY大学のGさんは他大学の学生とそうした活動を行っていた。しかし，通信遅延なくセッションを行うには専用のアプリケーションや機器が必要となるため，多くの大学生には難しかったと考えられる。対面活動ができなければ初心者への指導も難しいし，実店舗での楽器選びに付き合うこともできない。サークルが集団としての凝集性を高めるには目標を共有し様々な活動を行っていくことが必要であるが（横山，2011），対面活動ができないこ

表4　各サークルの2021年度の活動と各大学の状況（著者作成）

U大学	・5月までは授業は実施されず、サークル活動も禁止 ・県外移動については事前届け出が必要とされ、従事できるアルバイトについても許可制がとられた ・6月～12月は、県内で県内者のみでの、練習等の活動のみ許可（学外での演奏会等は実施できず） ・10月の大学祭、12月のクリスマスコンサートは中止 ・1月半ば～3月半ばまで、再び活動禁止（追いコンはオンラインで実施） ・授業は、前期は基本的にオンライン、後期は一部対面授業が再開
V大学	・前年度3月末からサークル活動禁止 ・8月上旬に活動再開となるが、サークル棟は荷物の取り出しを除いて使用不可、活動は外部で行うことに ・春の大学祭が9月にオンライン開催（サークルとしては学外の公園等で録画した演奏を配信） ・秋の大学祭が11月にオンライン開催（スタジオを借り音響機器をつけて録画した演奏を配信） ・11月に同大学の別のサークルで活動中に発生したとみられる陽性者が複数確認されたが、キャンパス外で発生した事例だったこともあり、サークル活動自体は禁止にはならず ・授業は前期は基本的にオンライン、後期は語学科目について2週に1回対面授業再開
W大学	・年度を通してサークルの対面活動が禁止となったため、実質的に活動ができず ・授業も原則的にオンライン
X大学	・サークル活動に対しては自粛要請が出され、対面式の新歓活動は全面禁止 ・6月上旬までキャンパス立入禁止で、6月以降もサークル活動はオンライン以外全面的に自粛することが求められた。 ・大学祭はオンライン開催（サークルとしては事前に録画した演奏を配信） ・3月から部室に入室することはでき、申請したうえでの活動もできたが、演奏に対する規制は依然厳しく、十分な活動はできず ・授業は前期は基本的にオンライン、後期に対面が一部再開
Y大学	・新歓は大学全体で無し ・2020年度はSNSも含めて何も動けず ・部室には30分間3名だけ入れたが、許可申請の手間もありあまり入れず、埃やカビが発生し、だめになった楽器もあった。 ・共有楽器のうちカビさせてはいけない大事なものは、インタビュー対象者が個人的に持ちかえって保管していた ・授業は基本オンラインで、後期から対面が一部再開
Z大学	・学期当初からずっと活動禁止で、対面での新入生勧誘活動も禁止 ・6月に対面での新入生勧誘が解禁されたが、入部しても活動ができないため実質的に勧誘はできず ・前期のイベントは全ては中止 ・9月に活動解禁となり10月から活動を再開したが、それまで18時～21時に行っていたのを17時からに前倒しして活動することに ・活動解禁時はサークル棟は通常通り使用可能だったが、大学の教室を借りて練習することはできず ・12月の定期演奏会は中止し、小規模な部内演奏会を学内で開催（10月から入った新入生の発表の場としても活用した） ・外部から演奏の依頼はあっても、受けられず ・その後感染状況によって、活動時間の短縮が求められることもあったが、2020年度の間は活動禁止にはならず ・授業は基本的にオンライン

とによってそれが非常に困難となった。これら3サークルでは，2020年度の新入部員は0名だった。

また，大学の正課の教育活動がコロナ禍への対応を進める中で，個人的な練習やオンラインの活動の時間を確保することが難しくなったという状況もある。Gさんは次のように語っている。

> 大学のオンライン授業ってすごい課題の量が多くて質が悪いみたいな話があって，［中略］［課外活動と課題の］どっちかを削るか命を削るかみたいな感じで，なかなかしんどかったですね。［中略］他の部員の子とかは本当に一切楽器に触れることなんてしなかったっていう風には聞いています。

オンライン授業の質をこのように一般化できるかについては疑問の余地があるが，勉学とサークル活動の両立が困難になったことは確かだろう。実際，学生の1週間の大学の勉強時間は，2019年が337.3分，2020年は441.1分，2021年は494.8分と，大幅に増加している（全国大学生活協同組合連合会，2022）。

一方，今回の調査では，国公立大学における活動再開が早かった。東北地方のU大学では6月から，東京都のV大学と中部地方のZ大学では後期から，それぞれ対面活動が解禁された。しかし，大学を挙げての新歓イベントがなくなってしまったこともあって，2020年度の新入部員はそれぞれ2名，0名，4名と，通常より少なかった。狭い部室で練習することが感染リスク上できなくなったり，通常の練習場所が使用禁止になったりするなど，活動場所の確保にも困難が伴っていた。さらに，演奏会が中止になったことにより，モチベーションの維持も大きな問題となった。Z大学のHさんは次のように語る。

> 演奏機会がなかったり練習できないから演奏できないっていうのはもちろんなんですけど，その大前提として先が見えなくて，いつ自分の発表の場所があるかわからないし，いつ活動が中断するかわからない，いつこの新歓で人が来て演奏を見に来てくれるかもわからないっていう中で，音を出し続けるモチベーションの維持みたいなのはすごく大変だったなって思います。

後述の通り，後から見れば早い時期に活動が解禁されたZ大学は恵まれた環境にあったと言えるかもしれない。しかし，先が見えない中で気持ちを維持することの困難は，他の大学の状況と同じものだった。

また，Dさんはオンライン授業とサークル活動の相性の悪さも指摘している。オンライン授業を大学で受けられる環境が整備されていなければ，授業は自宅で受けなければならず，特に遠方に住んでいる学生はサークル活動に参加しづらい状況があった。この状況はZ大学ではその後改善されていったようであるが，受講環境の整備はサークル活動を支援することにもつながると言える。

2－3．2021年度の活動

2021年度になるとサークル活動をめぐる状況について大学間の差が広がっていった（表5）。前年度比較的早い段階で活動が再開された国公立のV大学・Z大学はほぼ継続して活動を行えており，オンライン開催となった大学祭にも参加し，新入部員も獲得できている。

ここには学生の自治団体の存在が大きいように思われる。例えばV大学では，大学祭実行委員会からサークルに対して，オンライン開催のための補助金が約30万円給付された。これによってV大学のサークルは，外部のスタジオを借りて演奏動画を撮影することについて金銭的・精神的負担が軽くなったという。また，春の大学祭が9月に延期になった際も，結果は春開催中止となったが，ぎりぎりまで同委員会が大学当局と交渉していたようだったとBさんは語っている。さらに，キャンパスの自治会が大学当局に訴えたことも，サークル活動解禁が早まった要因だったのではないかと語っている。同様にZ大学でも，サークルの大学施設利用に関して文化系サークル取りまとめる学生団体が大学と交渉していたとHさんは語っている。

文化系サークルをまとめている学生団体っていうのがあるんですけど，すごく頑張ってくれたみたいで。別にZ大学フォルクがすごく抗議したわけじゃないんですけど，やっぱ他にもそこを使いたいって言っているサークルがいたみたいで，なんか貸してくれるようになりました。［中略］Z大学は優しくて，場所と時間さえ，この時間なら1年生がいっぱいいる校舎の前で演奏していいよって言ってくれたので，ゲリラ演奏みたいな形で路上演奏もできたので，本当に感謝ですね。それを何とか掴んでくれた学生団体には本当，ありがとうっていう気持ちです。［中略］学生運動の名残みたいな考えが強めな団体で，基本的には大学の方針には反対っていう前提の団体なので［中略］今回はそれがすごくプラスに働いてくれたなという感じです。

上記2大学とは異なり，国公立の大学で苦しんだのが東北地方のU大学である。感染拡大に伴って5月に活動が再び制限され，6月に延期して企画していた合宿は中止となった。いくつかの演奏依頼やコスキンも，練習時間が確保できなかったことから断念している。11月の依頼演奏や12月のクリスマスコンサートは実施できたものの，1月には再び活動禁止となった。そのため，いつサークル活動が禁止になるかわからない状態で活動に対するモチベーションを維持するのが苦しいとAさんは語っている。

一方で，私立でありながらV大学・Z大学に似た状況が現れたのがY大学である。Y大学は比較的大規模の大学であるが，文化系サークルを取りまとめる学生団体が大学当局と交渉することで，緊急事態宣言明けの11月に秋新歓が実施された。また，同団体は毎年公認サークルに交付金を支給しているが，2021年度は通常の交付金に加えてコロナ給付金31万円を支給した。Y大学のサークルでは部室に入れなかった期間にカビや埃の被害により部の所有楽器のいくつかが使用不能になってしまったが，この給付金によってそれらを新たに買いそろえることができた。また，上手な生の演奏を聞く機会が乏しいという点に対しても，この交付金を使って，外部で開催されているフォルクローレのライブ演奏を聞きに行くという対策がとれた。

これに対して，大規模私立大学のX大学では，インタビュー調査の限りでは，大学当局と学生団体とのやりとりがうまくいっていなかったことが見て取れる。Eさんは次のように語っている。

オンライン新歓の話も，あれは学生団体が主催でやってるもので，大学からのものではなかったですし，大学ポータルサイトにぽつんとニュースで載っていて。［中略］そもそも新歓サイトの存在を知らないような1年生でいっぱいだと。［中略］今までだったら入学式の時にサークル紹介のパンフレットも配られたと思うんですけど，今年は入学式ができてないのでそういうのもないですし，みんな自力で探すしかなかったんですよね。Twitterとかネット検索とかでっていうのがちょっとこちらから見てて大変そうだなと思ったので，そっちをもうちょっと大学がサポートできたのかなっていう感じはします。

大規模な大学の場合，サークルの利益をまとめる学生団体と大学当局のやりとりが，サークル活動に対する制限や支援に大きく関わっていると言える。

中小規模大学においては，別の状況が見られる。私立中小規模のW大学では，大学学生部の職員とサークル部員とが丁寧に交渉して，現状でできる範囲の取組を模索していた。W大学のDさんは次のように語る。

とても人数が小規模な大学ということもありまして，とにかく私が学生課の方に，存続のためにあれしたいこれしたいとか案を持っていったら，実現できた企画はとても少なかったのですけれども，親身に話を聞いてくださったりとか，何とかして実現してあげようという姿勢とかもすごく感じることはできたので。W大限定かも知れないけれど，行けば助けてもらえるという，行けば支援はいただけるという状況はありました。

表５　各サークルの 2021 年度の活動と各大学の状況（著者作成）

U大学	・4月の部活紹介は無かったものの、ミニコンサートは実施 ・4月半ばから、県内の大会やイベント等への参加は届け出を行ったうえで許可された ・5月には市のコロナウイルス警戒レベル引き上げに伴って、大会やイベント等への参加が再び不可となり、6月に企画していたサークル合宿を中止せざるを得なくなった ・地域の文化交流センターから演奏の依頼が来ていたものの、練習時間が確保できないため断った ・7月、オンラインで行われたオープンキャンパスに演奏動画を配信 ・9月にオンライン開催されたコスキンには、練習時間不足のため参加を断念 ・11月、高齢者学習サークルからの依頼演奏 ・12月、クリスマスコンサートを実施 ・感染状況に応じて、対面授業も学期途中にオンラインに切り替わることがあった
V大学	・5月、学内施設を利用したサークル活動が解禁され、サークル棟も16時まで使用可能に。ただし、それでは授業後に参加することができないため、活動を土曜13時-16時に設定 ・春の大学祭は5月にオンライン実施の予定だったが、直前に突然の延期発表がなされ、9月に延期となった ・7月から入構制限が緩和され、学外者が入構できるようになった ・10月、W大学の学生がV大学キャンパス内での活動に参加 ・11月、秋の大学祭がオンライン開催（一般人は入構不可だったが学外部員や音響機器業者は入構できたため、学内で演奏を撮影） ・授業は、体育科目・語学科目が対面授業
W大学	・対面の新歓活動は禁止され、大学主催でZoomを使ったオンラインイベントが開催された。他のサークルとの合同説明会の形で、ブレイクアウトセッションで興味のある団体のルームに移る形式がとられた ・前期には対面活動が解禁された期間もあったが、緊急事態宣言が発出されると対面活動は禁止され、対面活動ができたのは4月上旬と、6月下旬から7月上旬で、数回しかなかった ・後期には10月から対面活動が再開された ・10月にV大学キャンパス内でV大学のサークルの練習会に参加 ・授業は原則対面授業だが、学期中に一部オンラインに切り替わることもあった
X大学	・オンライン以外の活動の自粛は6月の緊急事態宣言解除まで継続 ・新入生勧誘のための演奏会を検討したものの、事前に参加者（聴衆）の氏名・学籍番号を把握し、参加者が未成年の場合には保護者の同意も得たうえで申請する必要があったため、現実的でないと判断し、演奏会は実現せず ・学生団体によるオンライン新歓イベントに参加したが、新入生の入部はなし ・6月下旬から活動の際の手続きは緩和されたが、サークルとして学内施設を使っての練習が再開できたのは8月半ば ・9月からは申請書なしでサークル棟に入室できるようになり、9月には小規模ではあるものの夏ライブを開催 ・11月の大学祭は大学関係者のみ参加可能な対面開催だったが、サークルとしては不参加（マスク使用に関する交渉が長引き、準備が間に合わなかったため） ・1月に卒業生等学外生を招いての演奏会を企画していたが、感染拡大によって再び活動禁止となり、企画は断念 ・授業は対面の割合が増えたが、オンラインが主だった
Y大学	・新歓は対面でも行われたが、時間が限定され楽器の生の音を出すことも禁止されたため、録音したものを流すとともに、オンラインも併用 ・練習や新入生向けの楽器体験は、学内施設が使えず、地域の公民館等も使えなかったため、近隣の広い公園で許可をとって実施 ・7月の大学祭はオンライン開催（演奏動画の配信） ・9月にオンラインで開催されたコスキンに参加（演奏動画の配信） ・10月の大学祭はオンライン開催（演奏動画の配信） ・11月に部室入室の制限が緩和され、学外者もキャンパス内に入れるように ・11月に、文化系サークルを取りまとめる学生団体が秋の新歓（食堂に合同企業説明会のような形でブースを設け、興味のある学生がそこに聞きに行く形式）を企画し、それにサークルとしても参加 ・前年度後期に引き続き、オンラインが基本で一部対面授業
Z大学	・2020年度秋学期から引き続き活動できており、新歓はオンラインも併用したが、ほぼ対面で実施 ・5月から大学の教室も活動に使えるように ・6月の大学祭はオンラインで実施（外部施設を借りて演奏をオンライン配信） ・宿泊を伴う合宿は中止したものの、スタジオを借りて連日通う形で実施 ・8月末から9月一杯は対面活動が全面禁止（サークルとしての大きなイベントはなかったため、影響は少なかった） ・11月、卒業生による現役生向けのライブが開催 ・12月、定期演奏会開催（対面で実施し、オンライン配信も実施） ・授業は対面が一部再開したもののオンラインが中心

実際に実現したこととしては，学内での街頭演奏（文化祭直前）や，衣裳やポスターの展示，大学ポータルサイトからの宣伝がある。その他，W 大学でも大学からサークルに対してコロナ禍援助金５万円があり，カビが生えてしまった楽器を買い直すことができたという。サークルと大学当局や担当部署との関係づくりは，サークル部員個人の性格に依存するところも少なくない。ただ，小規模大学においてはそうした直接的な関係づくりが行いやすい可能性はあるだろう。

大学とサークルとが直接関係をつくるのか，大学団体が介在するのか，その大学団体が大学当局とどのような関係を結ぶのかによってサークルの活動の在り方は大きく変わってくると言える。

３　コロナ禍における大学サークルの困難と可能性

以上，コロナ禍での大学サークルの活動を概観してきた。そこでまず指摘できるのは，危機の時代にあっては特に，サークル単体での活動に限界があるということである。そもそも他者に向けて演奏する機会がなければモチベーションの維持は難しく，集団の凝集性を維持することも困難となる。学内外の他者に向けた演奏の機会が必要となれば，サークル外との関係づくりは不可欠である。コロナ禍においては，その関係づくりが一方では難しくなり，他方では必要性に駆られて新たに生じていったと言える。

前者について言えるのは，ノウハウの共有の難しさである。今回調査対象としたサークルのうち東京・神奈川にキャンパスのある４大学は，コロナ禍以前から合同で定期演奏会を開催しており，サークル間での個人的な交友関係もあった。また，それ以外の大学サークルでも，コスキン等の演奏を通じて交友関係が築かれることがあったという。そのため，オンラインでの新入生勧誘について他大学サークル部員との個人的なつながりの中で相談していたことはあった。しかし，各大学によって状況があまりに違うため，適用・応用できる点が少なかったという。そのため，インタビュー対象者のほとんどが廃部の危機について語っていたものの，直接的な部員獲得という点に関しては，大学サークルを越えて協力し合おうとする動きはなかなか立ち上がらなかった。また，そもそも「マイナー音楽サークルという点が非常に大きくて，実際の楽器を演奏することもできないし，［中略］オンラインということで余計空気感が伝わりにくいので，そもそも興味を持ってもらえない」（D さん）という，オンライン活動に対する悲観的な見方も強かった。

しかし，2021 年度に入り，徐々に活動が再開されると，単に新入生を獲得するというところではなく，演奏技術の向上という，サークル活動の本旨に関わるところで，サークル間の連携や卒業生との連携が強まる機運が見られた。Y 大学では G さんの個人的な交友関係も活用して，Y 大学や V 大学の卒業生等を練習に招き，演奏指導を行ってもらっている。U 大学でも同様に，フォルクローレ演奏の社会人サークルに所属している県内の卒業生を招いて指導を行ってもらっている。フォルクローレには一般的に２種類の管楽器と２種類の弦楽器，太鼓が用いられるが，部員が少ない場合それらを兼任することになり，専門性の低い上級生が下級生を教えなければならない場面が出てくる。そうした技術の不足を補うために自大学や他大学の卒業生を頼らざるを得なくなり，それが卒業生との関係を新たに築いていくことにつながるのである。

こうした関係は直接的な演奏指導に限られない。マイナー音楽の場合，そもそも上手な演奏を生で体験する機会が乏しい。「何がうまい演奏かわからないしどういう風に演奏したらいいのかわからないから演奏ができない」（G さん）という不安がコロナ禍では特に付きまとう。そのため，上手な演奏を新入部員が生で聞く体験を担保するため，卒業生が協力している例もある。Z 大学では地元に就職する人も多く卒業生との関係が強く，コロナ禍以前には卒業生を招いて現役大学生の演奏の品評会を行っていた。しかし，コロナ禍以降にはそれだけではなく，2021 年には現役生向けのライブ演奏会を特別に開催することもあったという。

また，現役大学生同士の合同練習も実現している。これは大学ごとの状況が異なるからこそ生まれた連携

だと言える。W 大学は卒業生との関係も前述の大学程は強くなく，演奏技術について大きな不安を抱えていた。そこでV大学の練習にW大学サークルの部員が参加するという合同練習が2021年11月に開催された。W 大学と V 大学はコロナ禍前にも定期演奏会に向けた練習等で交流はあった。しかし，コロナ禍での対応という点で，新たな連携が生まれたのである。W 大学 D さんはこの合同練習に関連して，新入生に対しても部の存続に対しても誠実に向き合う態度を示している。

> 今の時期［＝ 2021 年秋学期］に入ってくれても，私たちは就活で教えることができずに，無責任な状態で勧誘するということになってしまいます。前期に関しても，一時期，入ってくれた子が入ってくれるのを躊躇していた時期がありまして，理由を聞いたら，「先輩がもう三年生で，今のところ新入生が私しかいない中，自分が入ったらどうなってしまうんだろうという不安が大きかった」と聞きました。それでその，他大学と交流が持てたら一緒に演奏できるかもしれないし，新しく入ってくる子も，先輩がいなくなるかもしれないけれど，他の方と交流があるならと安心感を持って新歓をすることもできますので，［中略］私のサークルに関しては存続するかしないかという状況だったので，そういった安心して活動できる場を整えることが，他大学の方に協力していただけることによってできたので，そういった面でも本当に，非常に大きかったです。

さらにその後，V 大学卒業生 C さんの呼びかけによって卒業生主催の合同練習会が 2021 年 12 月に開催された。これに先立ってC さんは各大学の卒業生を結びつける組織を立ち上げており，そこで参加者を募り，会場費を卒業生が負担して実施された。この練習会には関東の複数の大学サークル部員が参加したが，新たな展開の可能性も見せている。G さんはこう語る。

> 曲をするにしても，１年生と，あんまり練習ができなかった，１年間ブランクが空いてしまって練習できなかった３年生っていう，クオリティ的にもすごい心配な面があるので，［中略］他の合同練習会もしたいなって。OBOG 会には頼らない形のものも。

実際に卒業生との練習会に参加し，練習の在り方を直に経験して学ぶことによって，それを現役の大学生だけでできる形に応用しようと検討しているのである。それは卒業生をいずれ締め出そうという意図からではなく，卒業生が参加するものだけでなく，現役生だけで運営できる形を探ろうという前向きな考えから生じている。大学を越えた連携が，卒業生を介する形で新たに展開し始めているのである。

では，地域との関係づくりに関してはどうか。2018 年までのコスキンには大学生がボランティアスタッフとして参加し，運営を支援していたという。2019 年にはこれが台風で中止となり，2020 年度・2021 年はオンライン開催となったため，この関係は途切れかかってしまっている。また，各大学サークルが行っていた依頼演奏も，多くの場合途切れている。依頼があっても大学の規制によって断らなければならないこともあり，もどかしさや苦しさも見える。A さんは大学と地域の温度差を指摘しており，それが大学当局に対する不満につながる可能性もある。B さんは依頼演奏のノウハウや，どこからどのような依頼があったかの情報が下の代に伝わっていかないことを心配してもいる。

しかし，V 大学の別の卒業生がコスキンの運営の補助を行っており，これも卒業生を介して再び結びつく可能性がある。そして地域からの依頼演奏についても，同様の可能性が見える。2021 年に対面・オンライン併用で実施した Z 大学の定期演奏会には，毎年依頼演奏に行っていたデイサービス施設の方が来て，挨拶をしてくれたという。このことも踏まえて H さんは次のように語っている。

私もそのどこに普段依頼に行っていたのかとか，全然わからないんですけど，1回繋がった縁なんで，そのうちまた繋がるかなっていうのはあるなと思っていて。活動を続けていてそれをホームページに定期演奏会やりますとか載せて，活動を発信してさえいればいつか，もう一回ああそういえばフォルクローレ聞きたいなと思ったときにお声がかかるんじゃないかなと思って，まあ別にいいかなと思ってます。

この発言からは，サークルに関して途切れさせてはいけないものの優先順位を読みとれるように思われる。これまで，コロナ禍におけるサークルの危機について見てきたが，存続すべきと考えられているのはサークルそれ自体ではない。形だけ存続させようとするのであれば，活動の内実をよそに新入部員をとにかく入れるという活動に躍起になっただろう。しかし，少なくとも今回インタビューした中では，そのような動きは見られなかった。また，マイナー音楽文化の存続が一義的にあるわけでもない。サークルは「マイナーなスポーツや文化活動を学生が経験する入り口となり，ファン層の確立にひと役買ってきた」（石田，2021）ことは確かであり，セミプロレベルの卒業生が現役の大学生に協力することには文化継承の意図もあるだろう。しかし，結果として文化継承という側面があったとしても，学生にとってそれは中心ではない。

中心にあるのは，マイナー音楽を楽しむ学生文化の存続である。マイナー音楽の存続だけであれば，社会人サークルに参加するという選択肢がどの学生にもありうる。しかし，そうではなく，卒業生との合同練習会も，あくまで大学サークルが自律的に活動できるようにするための補助として機能していた。先のGさんの発言に見られるように，学生からは現役生による合同練習会の案も出ている。U大学も社会人サークルに吸収されればよいとするのではなく，社会人サークルの場も活用しながら，大学サークルの活動を継続させている。また，地域とのつながりは重要なものではあるが，それも一義的なものではない。確かに依頼演奏はモチベーション維持のための重要な要素ではあるが，最低限必要な活動としてあるわけではない。

コロナ禍におけるサークルの危機が明らかにしたのは，サークル活動の一義的な目的であったといえる。各大学サークルは極めて限られた状況の中で活動することを強いられた。優先順位が改めて問われ，一義的な目的があぶり出されたのである。各大学サークルで行われていたのは，その目的を中心に置いて他との関係を再構築していく試みであった。

おわりに

本稿で扱ったのは，多様な大学サークルがある中での一部分に過ぎないし，全国のフォルクローレ演奏サークル全てを調査できたわけでもない。しかし，この限られた例からも，大学サークルがコロナ禍の危機に面して，サークル外との多様な関係の中で自らの意義を問いながらその在り方を再構築していることが見て取れる。フォルクローレというマイナー音楽を楽しむ学生文化を，当該サークルは存続させようとしている。それを中心に構成するのでなければ活動に無理が生じ，サークル自体を形だけ存続させたとしても，地域との繋がりだけを存続させたとしても，サークルが育む学生文化は失われてしまうだろう。

では，そこから大学や大学教育に対してどのような示唆を得ることができるだろうか。大学当局にできるのは，そうした活動の一義的な部分を支援すること，あるいは邪魔しないよう配慮することであろう。本稿が明らかにしたのは大学サークルが多様な他者との関係の中で成立しているということである。それによって学生にどのような成長があるのかについては本稿の範囲外である。それが学生に豊かな学びの場を提供していることは明らかである。であれば，大学側の施策がそのつながりにどのような影響を与えてしまうのかということについて，大学側はこれまで以上に注意を向けてもよいだろう。

本稿の査読期間中，40年以上の歴史を持つある大学フォルクローレサークルが，2022年度末をもって廃

部することをSNSで発表した。当該発表によると，卒業生の協力を得て新入生勧誘を行っていたものの，メンバー全員が4年生で就職活動等のため定期的な活動もできず，苦戦した結果，廃部決定となったようである。コロナ禍によってサークルのもつ学生文化を味わう前に活動が制限され，サークル活動に価値を見出せないままに終わってしまった学生たちもいただろう。「サークル活動は学生の自主的な活動なのだから，存続の意志がないならそれまで」と切って捨ててしまってよいだろうか。意図的・目的的な教育活動は確かに重要であるが，サークル活動はその範疇に入らない価値を持つものである。危機の時代にその豊かさを守るために大学に何ができるか，改めて検討がなされてもよいはずである。

引用・参考文献

池田めぐみ，伏木田稚子，山内祐平（2018）「大学生のクラブ･サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響」『日本教育工学会論文誌』42（1），1-14.

石田かおる（2021）「学園祭も合宿も未経験　大学のサークル文化継承に赤信号」『AERA』34（48），24.

茨城大学人文社会科学部法律経済学科労働経済論ゼミナール・茨城大学学生団体学びと交流の秘密基地（2021）「コロナ禍における学生生活調査」（https://www.ibaraki.ac.jp/news/uploads/2021/12/coronakaniokeru_gakuseiseikatsuchousa2021.pdf）（2022年3月20日閲覧）.

江原謙介（2021）「大学スポーツの学生組織に関する事例的研究―新しい組織のあり方に着目して」『阪南論集　社会科学編』57（1），145-158.

佐々木達也（2021）「新型コロナウィルス禍における大学スポーツが受けた影響と城西大学の対応について」『城西大学経営紀要』17，1-19.

全国大学生活協同組合連合会（2022）『CAMPUS LIFE DATA 2021 ―第57回学生の消費生活に関する実態調査報告書』.

田澤実・梅崎修（2011）「大学生活への意欲と達成が自尊感情に与える影響―大学1年生に対する縦断調査―」，『京都大学高等教育研究』17，65-71.

東京大学消費生活協同組合（2021）「「緊急　大学生・院生向けアンケート」結果速報」（https://www.utcoop.or.jp/news/news-758/）（2022年1月30日閲覧）.

武内清・浜島幸司（2005）「部活動・サークル活動」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版会，31-55.

文部科学省（2021）「各大学の課外活動における感染症対策の事例」（https://www.mext.go.jp/sports/content/20210707-spt_stiiki-000016575-1.pdf）（2022年1月30日閲覧）.

横山孝行（2011）「大学のサークル支援に関する一考察」『東京工芸大学工学部紀要』34（2），8-14.

吉田卓史（2021）「コロナ禍における大学スポーツの活動状況に関する一考察」『福山大学経済学論集』45，17-30.

立命館大学新聞社（2020）「【詳報】立命館大学生1115人が回答《コロナ禍における学生生活実態調査》」（https://ritsumeikanunivpress.com/07/01/4257/）（2022年1月30日閲覧）.